

死を無駄にするな(1995年3月号掲載・安部 吉師)

この現場は JR 六甲道駅と国道 2 号線の間位置し、被害が大きかった地域の中にある。鉄筋コンクリート造 4 階建ての 2 階部分から上が北側に倒壊し、隣接する木造の民家を下敷きになっていた。震災から 1 週間、それまで作業を続けていた隊と現場交替して救出活動に入った。

いざ作業に取り掛かるとしても相手は鉄筋コンクリートのビル。至る所で鉄柱が突き出し、何時倒れてくるか分からないコンクリートの壁。足場も悪く、ひとつ間違えれば我々自身も生き埋めになるかもしれない。そんな危険な状況の中、付近住民から得た情報をもとに他都市の救助隊とともに救出を急いだ。重機による解体が始まり、少し撤去しては確認する作業が続く。しばらくして 2 階と思われる床が発見され、そこからは手作業となった。折れた角材、潰れた家具など色々なものを搬出する中、布団が発見された。「もしかしたら・・・」の願いも虚しく、その間から紫色に変わり果てた手が苦しさを訴えるかのように突き出ていた。

作業は一層慎重に行われる。

無惨にも家人の上にはタンスがのしかかり、さらにその上からビルの鉄骨が押さえつけている。タンスの撤去を試みるが、それが原因でビルが崩れるのではないだろうか。さまざまな不安がよぎる中、重機を操る作業員からアドバイスをもらいながら作業を続け、収容した。

身内を心配し、遠方からやっとのことで到着した人たち。できることなら避難所での再会を望んでいたはずだ。息絶えた家族を乗せて去っていく車。我々の作業は続いた。この現場は 2 日間にわ

たる長期戦だった。救助人員 6 名、すべて死亡救出だった。できることなら無事救出したかった。

紙一重で生き残った我々は、この地震で亡くなられた方々の死を無駄にしてはいけない。